

ヴィクトリア朝のペットブームと犬泥棒

三神和子

(一) ペットとしての犬の流行

十九世紀イギリスに空前のペットブームが起こり、イギリスは一大ペット王国となる。昔から他の国と同様イギリスにおいても動物を飼われてきたが、十九世紀になるまでペットを飼うことは一部の特権階級の人びとに限られてきた。役に立つ動物——つまり、羊の番をしたり馬車を引いたりする働く動物や食料になる動物——は、いつの時代にも飼われていた。しかし有用以外の目的で、愛玩したり自分の欲びのために動物を飼うことは、もっぱら僧侶や尼僧、貴族に任されてきた（カラン一八九）。広大な土地をもつ貴族が馬を誇らしげに飼ったり、国王が犬を愛玩したりしたことは、よく知られている。動物を飼うということは、その動物を扶養することであり、経済的に余裕のある者にしか、有用でない動物を飼うことはできなかったのである。しかし十九世紀になると、とくにヴィクトリア朝（一八三七—一九〇一年）になると、多

くの人びとがペットを飼い、「ペット熱」と言ってもよいぐらいの流行が起きる。ペットを飼ったのはこの時代に隆盛した中産階級の人びとであり、それも都市に暮らす人びとが中心であった。ヴィクトリア朝のペットブームは中産階級のイデオロギーと産業改革における都市化が促進した現象である。

このペットブームにおいて中産階級の人びとがペットとして求めたのは、おもに犬であった。ヴィクトリア朝のペットブームと言えば、犬のブームを意味する。それももちろん猟犬ではなく、都会の家庭で飼う犬のことである。

産業革命以前、犬はおもに働く動物として扱われ、博物学者などよほどの専門家でないかぎり、一般庶民の目には働く機能によって分類されていた。たとえば、荷物運搬用の犬、客を運ぶコーチドッグ、小さな害獣を殺す駆除用犬、踏み車を廻す犬、貴族の狩猟用に飼育される猟犬、羊などの番をする牧羊犬、といった具合である。一般の人びとが犬を犬の種類によって分類し始めたのは、十九世紀になってからのことであ

る。犬の関心が高まってからやつと人びとは犬の種類に関心を抱きはじめた。一般人向けの犬の図鑑や本が出回り始めたのは、十九世紀初頭になつてからである¹⁾。

それまで、犬が働く姿は街のなかでもあちこちに見られ、犬は公共の場に活躍の場を得ていた。それが十九世紀になつて動物愛護精神が高まり始めると同時に、犬は急速に愛護される対象になり、ヴィクトリア朝ペット熱の中心に据えられる。このペットブームのなか、犬の所属する場所も仕事場という公共の場所から家庭という私的空間へと移り、犬は労働力から扶養家族となつた。大切な家族の一員として家族の集合肖像画や写真の中に収まることにもなつた。死後も、もはやゴミとして処理されることはなく、人間と同じようにペット用の墓地に埋葬される犬もいた。愛犬の写真をレースの縁取りの写真立てに飾ったり、形見として毛を一房とっておく飼い主も少なくなかつた(ダヴィソン 三七七)。

犬は愛の対象として飼い主の人生にしっかりと組み込まれ始めた。愛され保護され慈しまれて、ペットの犬はもはや人間とは異なる獣として捉えられるのではなく、動物であつても、人間と近い関係にある存在として捉えられるようになった。

もちろん当時、こうした愛されて丸々とした家庭の犬がいる一方で、裏通りをうろつく飢えた野良犬や(ダヴィソン 三七七)、貴族の猟犬や牧羊犬など田舎で働く犬や、動物愛護法をくぐりぬけて闘犬や牛いじめで闘う犬がいたこともれっきとした事実である。

ペットとして求められた犬の種類は流行や好みがあつて多岐にわたるが、概して人気があつたのはスパニエル犬と小型テリアであつた。ヘンリー・メイヒューによれば(五二)、一八五〇年頃の犬の街頭商人の場合、売上げが一番多かつたのがスパニエル犬であり、売上げの半分以上

を占め、残りの半分以上を小型テリアが占めた²⁾。もちろん街頭商人からではなく、きちんとした犬屋から「良い犬」を買う人びとも多くいた。「良い犬」とは血統が良くて血統を証明する十分な書類が付き、ドッグショウ(初めてのドッグショウは一八五九年に開催される)で優秀な成績を収めた犬のことである。そのような場合、求められる犬の種類は、ボメラニアン、プードル、セッター、ハウンド、コリー、ブルドッグなど、様々である。純血種が求められ、雑種は問題外であつた。

ちなみに、猫は犬ほどペットとして大騒ぎされなかつた。猫は鼠を捕る習性から有用であり続けたし、性格も素っ気無いというイメージが強く、愛すればそれに応えるという当時の人びとがペットに求める重要な条件に欠けていると思われていたからである。勝手気ままに家を離れて自由に徘徊することも、当時重要だと考えられていた家庭の構成員としての規範に合わなかつた。また、うろついている間に勝手に相手を選んではしまうことも、選り抜かれた掛け合わせによつて良種を保とうとする当時のセレクトイヴ・ブリーディング好みにも合わなかつた。もちろん猫を飼っている家庭はたくさんあつたが、猫をペットとして認識することは犬に比べればだいぶ遅かつた。どちらかといえば、猫を飼うことは、餌代も手間暇もかからないことから、イメージとして労働者階級と結びついたり、家庭的でないことから、ひとり暮らしのミストレス(愛人)が飼うものという観念をもたれた(カラン 一九〇)。遅まきながらヴィクトリア朝の後半には猫も「ペット」として意識されるようになり、一八七一年には水晶宮で初めてキャットショウが行われたが、ペット熱は犬のレベルには達しなかつた。

それでも、一八九〇年代にシャムネコの人気が高まつたことがあつた。それは当時の多くの人びとがこの猫についての物語を信じたからで

ヴィクトリア朝のペットブームと犬泥棒

あった。その物語とは、シヤムネコはシヤム(タイ)の国に起源を發していて、シヤムの王様のお気に入りであったために、シヤムの王様だけがこの猫をもつことができた。それをこっそりイギリス人が一番をもちだして西洋に連れて来たのだというものである(カラシ 一九二)。貴族崇拜で排他主義のヴィクトリア朝人たちはこの物語を喜んで受け入れ、シヤムネコを崇めた。一八九〇年代のイギリスは、洋服や髪飾りのスタイルや扇の所持にいたるまでスペイン文化が流行した年代でもあったが、当時の人びとは猫をとおして東洋の香りも楽しんだのであった。話を犬に戻せば、犬のペットは、愛されるばかりでなく階級意識と結びつき、犬を飼うことは中産階級のステイタス・シンボルとなった。前述したように、昔はペットを飼うことが社会の上層の特権階級のものであった経緯から、ヴィクトリア朝の中産階級の人びとにとってペットを飼うことは貴族的な上品な趣味に映った。その文化的傾向において何でも貴族の真似をしたがった中産階級の人びとが、この趣味をとりこぼすわけはなく、彼らはペットを飼うことよって貴族階級との精神的文化的同化をはかり、かつ下の労働者階級との差を広げようとしたのである。

だから彼らのなかには身分の高い者が飼っている犬と同じ種類の犬を飼う者もいた。彼らの方で貴族の趣味に合わせたり、また、わざわざ購入しなくても同じ趣味だと判ると大喜びしたりした。ヴィクトリア女王が愛好したためにコリーやポメラニアンの人気が上がったたり、ウィラビー卿やその他の貴族のおかげでパグが「貴族的だ」として人気が回復したりした(リトボ 八九頁)。「ケネル・レビユー」や「レディース・ケネル・ジャーナル」など当時愛犬家が購読する雑誌が次々と発行されたが、これらの雑誌は身分の高い人たちの犬の紹介記事を載せた(リトボ 八八)。たとえば『ケネル・レビユー』はヴィクトリア女王のお気に

入りのペット(コリーとテリア数頭とダックスフンド一頭)を特集したり、「レディース・ケネル・ジャーナル」は一八九六年に「今年注目の犬と飼い主」と題した爵位のある者たちの犬の写真集を発行した(リトボ 八九)。愛犬家の読者はこれらの記事を喜んで読み、同じ犬種を飼う者として、また、同じ愛犬家として、自分たちと身分の高い者たちとの仲間意識を楽しんだのである。

また、貴族と同じ種類でなくとも、「良い犬」を飼うことによって社会的地位を上げようとする飼い主も出てきた。彼らのなかに、より「良い犬」を所有すればするほど、社会のより上層に仲間入りできるといふ思い込みがあったからである。ドッグシヨウなどで彼らが自分の犬がより上位につくことを願ったり、賞を獲得した犬を高値で購入したりしたのも、そのおもな動機の一つはこの思い込みにある。

ドッグシヨウは頻繁に開催された。十九世紀、とくに中葉にさしかかると、犬種は何度も区分けされて、そのたびに「理想の犬」の規定ができ、その規定のもと犬の優劣が競われた。外見のみを競ったものであったが、一八五九年六月二八日にニューカッスルで最初のドッグシヨウが開催されて以来、ドッグシヨウは隆盛し、またたく間に大規模なものが年に何回も開かれるようになった。「一九〇〇年にある専門家が算定したところによると、『土曜日と日曜日を除くと、一年中平日には毎日どこかでドッグシヨウが行われている』という」(リトボ 九八)。そして一八七三年にはドッグシヨウを支持するケネルクラブが設立され、品種の基準を作り、ドッグシヨウで賞を与える際の理論的説明を示した。純血種の犬の同定と血統の確立を目指したのである。さらにケネルクラブは一八七四年に『血統台帳』の第一巻を出版し、一八五九年以降にドッグシヨウに出場した犬を挙げ、賞をとった犬を集中的にとりあげた(リト

ボ 一〇二、一〇四)。「血統台帳」によって純血種の犬の記録をとり、登録のシステムを作ったのである。すぐに全国規模の登録制度がこの「血統台帳」に合わせて作られた(リトボ 一〇四)。そして未登録の犬は、ケネルクラブ後援のドッグショウに参加できないことになった。これらのドッグショウと犬の等級や優劣の基準の設定によって、「良い犬」の基準が決まった。そして、選ばれたエリート「良い犬」をもつことは、選ばれたエリートの飼い主として社会的上層に位置するという思い込みができた。犬の地位は飼い主の社会的地位を、購入時の犬の値段は飼い主の財力を表すと考えられるようになった。ヴィクトリア朝の中産階級の人びとは犬によって自分たちの社会的地位の強化をはかった。

おかげで、ドッグショウで賞をとった犬の価格は雪だるま式に高騰し、たとえば、賞をとったコリーやセント・バーナードは一〇〇ポンドにまで値が上がり上がったそうである(カラン 一九二)。労働者階級の平均的給与が年一〇〇ポンドを下回るときである(カラン 一九二)。一方、自分たちより下の階級に関しては、中産階級の愛犬家たちは彼らとの切り離しも積極的に行った。労働者階級が犬を媒体に自分たちと同化しようとするのを夢中になって阻止し、労働者階級の人びとを締め出した。ドッグショウにおいて犬には端正さが求められるが、このとき端正さが求められるのは出場する犬ばかりではなかった。出場する犬の飼い主にも観客にも、服装や立ち振る舞いに厳格な端正が要求された。このリスベクタビリティーに関する規則は、労働者階級の参加を拒むことになった。ハリエット・リトヴォに言わせれば(九八)、ドッグショウは犬ばかりでなく人間をも選別したのである。

そして中産階級の人びとは、愛犬のために惜しみなくお金を使った。当時、犬のブリーダーや街頭の犬売りなどの、犬の購入に関する商売の

他に、犬の飼育にまつわる商売がペットブームに乗じて数々登場し、どれも愛犬家の気をひいたからである。たとえば、首輪(同じく街頭商人によって売られたものから、飼い主と犬の名前のイニシャルを彫りこんだ金銀、および真鍮の高級品まであった)が売られていたかと思うと、犬の洋服(散歩用、旅行用など、サテンのウエディングドレスまで様々あった)が売られていた。また、スプラッツ製法特許「ファイブリアン」犬用パンやお肉、アッシュワース特許の「金属製毛梳きブラシ」、ポールトン・ポール商会の庭付き犬舎、他にも髪飾りやアクセサリ(これらは当時の女性ものの流行を追っていた)など、限りがなかった(リトボ 八六)。さらに後に述べるように、なんと犬を誘拐して身代金を得る闇の商売もあった。これらの贅沢品はもちろん飼い主が愛犬への愛情から購入するのであるが、彼らの見栄と階級意識も大いに手伝った。犬を飼うことと同様、ペット用品も彼ら中産階級の階級を表す必要品となっていた。

ちなみに、当時は犬ばかりでなく小鳥や魚や爬虫類まで、生きた動物を街頭で売っていた。犬売りの街頭商人が好んで立った場所は、リージェント・ストリート、ウエストエンド、ハイドパークのサーペンタイン池、王立取引所、イングリランド銀行前であった(メイヒュー 五二)。

(二) 犬の人気の秘密

犬がどうしてこのようにペットとして人気が出たのか、その理由を考えてみると、いくつか挙げることができる。まず、犬を飼うには、馬を飼う場合のように広大な敷地を必要とせず、高望みや野心を抱かなければ、ほどよい費用で飼うことができたという点が挙げられる。犬は都市

ヴィクトリア朝のペットブームと犬泥棒

の住宅でも何不自由することなく飼うことができた。また、ヴィクトリア女王が大の犬好きとして名を馳せていたせいで、貴族を真似する中産階級の人びとが、貴族中の貴族であるロイヤルファミリーの手に従った点も挙げられる。さらに、犬のセレクトイヴ・ブリーディングに堪える繁殖能力が、ヴィクトリア朝人の排他的エリート主義に合致した点も見逃せない。馬が高値の花である彼らにとって、犬は血統を見せびらかすことのできる格好の動物であり、その所有は飼い主にセレブリティを取りを満喫させた。

しかしなんといっても、犬がペットとして人気を勝ち取ったその第一の理由は、犬に備わっている性質が、当時の家庭礼賛の価値観と結びついた点にある。犬が、当時彼らが生活の中核として重視していた家庭の概念と合致し、かつ家庭を強化したからこそ、大流行したのであった。犬の愛情に応える能力も、人間と交流できる知力も、また、人間側のソーシャルステータス強化願望もエリート願望も、すべてこの家庭礼賛の価値観と密接に絡み合っている。

ヴィクトリア朝という時代はイギリスが、植民地、保護領、自治領を抱えた政治経済の中心地として繁栄を極めた時代であったが、同時にそこで働く者にとっては仕事の世界で鎬を削る競争社会であった。過酷な戦いを繰り返す戦士たちにとって、英気を養うためにも安らぎの場所がぜひとも必要であった。その安らぎの場所の役を担ったのが家庭である。この時代、家庭は過酷な仕事の世界から戦士である男性を避難させる安らぎと癒しの空間、慰めを得る憩いの場として位置づけられ、重きを置かれた。職場や政治といった公領域に相対立する誰にも侵されないプライベートな空間として大切にされた。そして、社会の汚れや醜悪さを遮断した聖なる無垢な空間として神聖視された。家庭はほとんど人工

的なイメージを創り上げられ理想化されて、礼賛されたのである。イギリスの経済社会を自分たちが支えていると自負していた中産階級の人びとにこの家庭礼賛のエネルギーは最も強く働いた。しかし彼らが仕事場と家とを物理的にも心理的にもくつきり分離させ、家庭を外界の社会から遊離させた一方で、家庭が外界の社会とびったりと結びつき、主の社会的経済的地位を示すバロメーターとなっていたことも事実である。ヴィクトリア朝社会では、主の経済力や社会的地位が家庭の消費能力——すなわち使用人の人件費、家族の食費や衣料費、教育費、レジャー費など——を素直に映し出すのはあたりまえだと、また、映し出すべきだと考えられていたからである。

中産階級を中心としたこの家庭礼賛のエネルギーのなかで、犬は家庭の役割を増強した。当時の人びとが犬のなかに見出した数々の性質や能力、たとえば忠誠心や信頼性、無邪気さなどの犬の特質とも言うべき性質、愛情に応える愛情深さ、人の気持ちや言葉を理解し、それに応える知力や能力などは、人を慰め人に安らぎを与える力を発揮するが、それが当時の家庭の概念と合致し、家庭の安らぎ度、慰める能力を高めたのである。犬は主に憩いをもたらす重要な要因となった。もちろん、それは主にとってばかりでなく、家族の他のメンバーにとっても同じである。他の家族も含めて家族全員が家庭という場で犬によって慰められ安らぎを与えられ、犬を愛し犬と触れ合うことで倍増した憩いの空間を築きしんだのである。また、彼らが犬によって補強されたエリートとしての階級意識も満喫したのは言うまでもない。

しかしながら、このペットブームにおいて犬が犬という動物としてありのままに捉えられたのではなく、「家庭」と同じく、勝手に理想化されたイメージで捉えられていたことは留意すべきである。もちろん彼らが

認めた犬のイメージは犬に備わっている性質や特質に違いないのではあるが、当時の人びとは野性的で獠猛な部分も含めたありのままの犬の姿をまるごと受け容れるのではなく、自分たちにとって都合の悪い（野性的な部分）を捨て去り、自分たちにとって都合の良い部分を誇張して、変容し理想化した犬のイメージを作り上げた。犬の忠実、従順、誠実、無邪気、信じやすさなどが大いに過大評価された。当時人気のあった動物画家エドウィン・ランドシア卿（一八〇二―七三年）の絵画『年老いた羊飼いの哀悼者』（一八三七年）などは、当時の人びとが犬に寄せていたイメージ（主人思いの忠実な犬）を典型的に表している。

さらに考えてみるなら、当時の中産階級の家庭におけるペットの犬の役割は、女性の役割と酷似している。家庭礼賛のイデオロギーを生み出した家父長制社会において、外で働く戦士は男性（夫や父親）、家庭という城を守るのは女性（妻や娘たち）に振り分けられ、女性の居場所は家庭だと決まっていた。そして女性の、とくに妻の務めは、傷つき疲れて帰宅する夫を慰め癒すことであると考えられていた。妻は「家庭の天使」という理想像のもと、家庭を安らぎの場所、憩いの場にしたてる役割を荷わされていた。しかしもちろん家庭を居心地良くするために女性が自ら体を動かして働いたという習慣はない。家の中には料理、洗濯、掃除を引き受ける使用人が複数おり、中産階級の女性にとって有閑であることがなよりの階級の証であったのである。夫を慰め夫に明日への活力を与えることこそが妻の務めであった。それは女性が弱く傷つきやすく保護されるべき存在と捉えられていたからである。

この家父長制の社会において、肉体的にも精神的にもそして知力においても一人前でないと考えられていた女性は、結婚前は父親に従い、結婚後は夫に従うことがよしとされた。夫という大樹にからまる蔦のよう

にである。従順で夫に忠実で、心から夫を尊敬し信頼し、世間の埃に塗れず無垢で、それでいて夫の気持ち（もちろん言葉も）理解し、夫と心を通わせ合い、夫に慰めと安らぎを与えることが「妻」の役目であった。ペットの犬と同じ役目である。そして法的にも妻の権利はなかった。妻は夫の保護下の存在として法的権利はなく、選挙権はもちろんのこと、一八七〇年にほんの一部が認められるまで財産権もなかった。女性も夫の従属物、夫の所有物として夫に飼われていたのである。妻が多数の場合持参金つきで結婚したことを考えると、この時代の中産階級以上の結婚は、妻を「購入する」というイメージさえ抱かせる。このように、女性とペットの犬はなんと多くの共通項をもつことだろう。女性はペットを自分の持ち物や保護する対象と想っていたかもしれないが、実は両者は家長の夫や父親にとって同じ役目を行う似た者同士であり、身分も同じようなものであった。ペットの犬の扶養家族としての認識が高まれば高まるほど、犬と女性とはより似た境遇にあったと思えてくる。

女性たちのなかには両者が似た者同士であることを無意識ながらも感じとっていた者が少なからずいたのでないだろうか。動物愛護の精神が高まり動物虐待を防止する運動が起こったとき、この運動に加わるばかりか率先して活躍した女性の数は多い。たとえば、ジャーナリストとして活躍したフランシス・パワー・コブ（一八二二―一九〇四年）は、動物の生体解剖に反対し、みずからヴィクトリア・ストリート協会（一八七五年）を立ち上げて、この反対運動を先導した女性だが、同時に女性解放論者として、女性参政権獲得や既婚女性財産法の改正を求めて健筆を揮ったことは有名である。彼女の論説「妻を殴る者たち」（一八七八年）は、夫の妻にたいする暴力を訴えたものだが、ここに展開されている女性への虐待の告発は、まさに動物虐待の告発と防止の主張と共通

ヴィクトリア朝のペットブームと犬泥棒

する。家庭の弱者として、そしてその家庭礼賛のイデオロギーを生み出している社会の弱者として、彼女たちはペットの犬に、そして動物全体に、自分たちの姿を見出し共感して、自分と同じ弱者の犬や動物に救いの手を差し伸べたのだと考えられる。女性が犬の立場に共感するのは、女性が男性より情け深く、また自然に近いからではなく、互いの立場が酷似していることが要因の一つになっていると言える。

(三) 動物愛護精神の背景

このようにヴィクトリア朝に花開いた犬のペットブームは、十九世紀になって一気に高まった動物愛護精神の大きなうねりの一環であると考えられる。その動物愛護精神の高まりの背景にはおもなものとして三つの要因が挙げられる。どれも十八世紀後半から十九世紀初頭にかけて起こり、十九世紀が進むにつれて発達していったものである。ジェイムズ・ターナーも指摘していることだが、それらは福音主義的な慈悲心の崇拝、生物学的概念の浸透、自然礼賛の姿勢の高まりである³。これらによって、人びとの心の中で犬は野獣から人間に近い動物へと変わり、思いやりや愛情をかけるべき対象へと生まれ変わったのである。

まず、他者への慈悲心から見てみると、十八世紀の福音主義は他者への思いやりや共感を説いたが、その主張は十九世紀になって急速に社会改良というかたちで具体化されはじめた。他者への同情心が動因となって弱者に対する社会改革を引き起こしたのである。たとえば、福音主義者で政治家のウィリアム・ウィルバーフォース（一七五九—一八三三年）は、奴隷制廃止運動を起し、一八〇七年にイギリスにおける奴隷売買の廃止、一八三三年には大英帝国全土における奴隷制廃止にこぎつ

ける。また、福音主義者の政治家第七代シャフツベリー卿（一八〇一—一八五年）は福祉団体シャフツベリーソサエティを一八四四年に設立するほか、工場労働者の労働時間の短縮や児童労働の年齢制限に尽力し、一八四六年に十時間労働法を実現した。彼の精神病院の調査と改善の努力も有名である。このほか福音主義的慈悲の心はヴィクトリア朝の道徳の基盤となつて、貧民学校の開校や売春婦の救済、刑務所の待遇改善など、個人の慈善活動から組織団体を組む社会活動まで、そして国政レベルの法律の制定を目指すものまで、様々なかたちで他者への思いやりを示し、共感し、弱者を救済しようとした。ヴィクトリア朝の博愛主義の根底を流れる主要な思想の一つとなっている。

以上の他者への思いやりは、弱者といつても人間に対して示されたものだが、思いやりの対象は人間だけに留まらなかった。十八世紀の慈悲心の伝統が、最初は身近な友人、次に同国人、そして他国人、それから高等動物、そして感覚力のあるあらゆる生き物に慈悲深い同情心をかけるようにと教えていたごとく（ターナー 二三）、思いやりは生き物全体を包括する全体像のなか、動物にも向けられはじめた。したがって人間に対してと同時に動物に対しても慈悲心を示した人たちがいた。たとえば先程のウィリアム・ウィルバーフォースは牛いじめ根絶の闘いを指導し、後に王立動物虐待防止協会の設立に尽力した。そして第七代シャフツベリー卿は動物の生体実験に反対する会の会長になり、動物愛護のために活躍した。また、女男爵アンジェラ・ジョージアナ・バーデット・クーツ（一八一四—一九〇六年）は、祖父から受けた莫大な遺産を貧民学校や売春婦救済の家ウラニア・コテッジ（一八四七年設立）など慈善活動に費やしたことで有名だが、一八七〇年ウィルバーフォースが設立に尽力した王立動物虐待防止協会（R.P.A.C.S.）の女性部門の会長とな

る。十九世紀の動物への思いやりの活発な運動の多くは、十八世紀からの福音主義的な他者への慈悲心の崇拜から生まれ出たものであり、十九世紀に花開いた数々の社会改革と同源のものと言える。女男爵バーデットクーツが王立動物虐待防止協会の女性部門の支部として王立児童虐待防止協会を立ち上げたことは、動物と人間への二つの活動が同源であることを如実に物語る。王立動物虐待防止協会は、福音主義が支える数ある協会の一つである（ちなみに、YMCAもその一つである）。

次に動物愛護精神の高まりの背景として考えられるのは、生物学的概念の知識の浸透である。チャールズ・ダーウィン（一八〇九―一八八二年）が『種の起源』（一八五九年）や『人間の由来』（一八七一年）で唱えた進化論はたしかに画期的で、生物学ばかりでなく当時の社会思想にまで広く影響を与えたが、実は彼が進化論を発表する以前から、人間を進化の視点で捉える理論は唱えられていた。ターナーによれば、早くも十八世紀の博物学の中には、人間を「途切れなく連続する自然の諸形態」であると、そして自然という大きな一つの「縫い目のない織物に組み込まれている存在である」と捉え、「人間を動物から分ける明確な線はない」と考える思想があった（一三三）。その思考の根源は十八世紀以前にさかのぼるとも言えるそうである（一三三）。人間が神に創られた特別な存在ではなく、自然の秩序の中で生まれ出た存在であり、人間と動物とが自然界の中で近い関係にあることは専門家のあいだでひたひたと認められはじめていた。

そしてこの専門家の知識が十八世紀から十九世紀にかけて教養ある一般人に浸透していった。この浸透には、チャールズ・ダーウィンの祖父であり医師であり詩人であったエラズマス・ダーウィン（一七三一―一八〇二年）や、フランスの博物学者ジャン・バティスト・ラマルク（一

七四四―一八二九年）も大いに貢献した（ターナー 一三三）⁴。二人の進化論は詩的な物語や解りやすい読み物となつて、一般人の意識の中に人間と動物の生物学的に近しい関係を無理なく埋め込んでいった。

この人間と動物の距離の狭まりに関して、当時の人びとが、人間が動物に近づくのではなく、動物の方が人間に近づく方を選んだのは言うまでもない。遠い先祖にせよ、彼らにとって自分のなかに野獣を抱えることは好ましくあらぬことであつた。実は、十九世紀後半には、ロバート・ルイス・ステイブンソンが『ジキル博士とハイド氏』（一八八六年）で描いたハイド氏の獣性のバーソナリティに表されているように、もうはつきりと多くの人びとが人間と野獣がつながっていることを認めていた。しかしそれは人びとに恐怖と不安と嫌悪を与えた。思想も文明も、最も先端をゆき最も洗練された人間であると自負していたイギリス人にとって、それは許しがたいことであつた。この難問を前にして、人びとはうまい方策を立てていた。彼らは自分たちと動物のつながりを見ると、動物の野獣性はなるべく視野の外に置き、動物の良い面を見るようにした。動物の良い性質、忠実、忍耐強さ、純粹、無邪気、勤勉などの性質をとりあげ、惜しめない称賛を与えた。生物学的に近しい関係にある以上、人間は動物と良い面をつながっていないとならない。人びとの中に動物の格上げが必要な事情があつた。

ペットと人間の親密性や家族への仲間入りも、この動物の格上げの結果生まれたことである。ペットが家族の一員になることによって、よもや人間のほうが野獣の仲間へと墮落したりはできない。

そしてこの人間と動物との近しい関係は、前述した福音主義的な慈悲の心としっかりと結びついた。動物が人間と異なる存在ではなく、互いに近しい関係にある以上、慈悲の対象を人間だけに留めておく必要はな

ヴィクトリア朝のペットブームと犬泥棒

い。動物の苦しみも同胞の苦しみとして捉えるべきであり、動物を苦しい状態においておくべきではない。理性や知力の点でははるかに勝る人間は、弱い立場にある動物に慈悲の心をかけ、愛護すべきなのである。十九世紀中葉になってチャールズ・ダーウィンが人間と動物の親戚関係を明言すると、人びとは動物との絆をさらに強め、動物への親近感と慈悲の心を深めていく。

第三の動物愛護精神の背景には、自然礼賛の姿勢の高まりが挙げられる。前述した博物学の知識の普及もあって、人間が自然の一部であることは徐々に人びとに受け容れられていったが、十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、及び十九世紀が進むにつれて広まった自然礼賛の気持ちは、人間が自然の一部であることを、さらには人間が自然界の動物であることを受け容れやすいものにした。十八世紀は理性の時代と言われ、その理性を司るのが人間であり、人間とは相容れず敵対する自然を征服するのが人間と自然とのあるべき関係と考えられていたが、実は博物学の研究が行われていたとおり、十八世紀中に人間をその一部として捉える自然観は抱かれはじめており、また十八世紀の末頃からは自然を征服する対象として見るのではなく、心の拠り所とする自然観が展開しはじめていた。自然を「社会の合理化からの逃避の手段」(ターナー 三三三)として捉える自然観である。自然を敵対物や無味乾燥な観察物としてではなく、人間の精神や心に潤いや慰めを与える豊かなもの、人間をやさしく包み抱きかかえてくれるものとして捉えるようになったのである。このとき自然は厳しさと破壊力をもつ負のイメージよりも、生命を育み人間を癒す力をもつ正のイメージで捉えられている。

この自然観は、自然を産業社会の機能性や合理性、人工のリズムと対立させている。十九世紀も進むと、多くの場合、自然は田舎や田園と

いったのどかな自然へと理想化された。合理化を尊ぶ産業社会に相対立するユートピアとして機能するようになった。したがって自然は、俗物的社会に穢されない高潔な精神にふさわしい所、鉄道の時刻表や工場の時間割といった産業社会が産み出した人工のリズムとは異なる生命のリズムが奏でられる場所、競争や闘いを離れてゆとりと安らぎの得られる場所、近代化したイギリスが置き忘れた古き良きイギリスの暮らした場所、人間本来の姿に立ち返ることのできる場所などと高く評価され、礼賛されるようになった。

当然のことながら、当時の人びとの心に、この自然の礼賛は、自然への回帰願望をもたらした。密集した人口と大気の汚染のなか、煤けたレインガの建物に囲まれて暮らす都市の人びとにとって自然への回帰はぜひとも必要であった。しかしもちろん貴族のような大金持以外、田舎に邸宅を構えることなどできない。それで人びとは自分たちの財力に応じて夏の別荘を借りて、ひと夏じゅう田舎に滞在したり(ビートルクス・ポターの家の夏の別荘住いは有名である)、スイスの山や湖にかけたたり、矛盾するようだが産業改革の権化である鉄道を使って海水浴に行ったり、日帰り旅行に行ったり、ハイキングに行ったり、サイクリングツアーをやったり、財力に応じてそれぞれ自然回帰の願望を満たした。ガーデニングの流行も、田舎や海への旅行と一石二鳥になる博物学の長期に渡る大流行も、この自然回帰願望の成せる業と言える。

そしてペットを飼うこともこの自然回帰願望の一環である。ペット——それは理想化された自然と同じく理想化された動物だが——を飼うことは、当時の人びとにとって自然との結びつきを意味した。動物との触れ合いは人びとにユートピアとしての田舎や田園での生活へと立ち返らせ、大地とのつながりを思い起こさせた。動物への思いやりやさし

さは自然への擁護であった。ペットを飼うことが都市の人びとに流行した現象であったのは、このような都市に暮らす者の自然回帰願望と自然礼賛の気持ちとその反動として強かったせいである。

動物愛護運動が初期の頃都市において盛り上がりを見せたのは、同じ理由によるものである。動物愛護精神の高まりには、自分を自然の一部として認め、かつその自然を良きものとして礼賛する姿勢が必要である。

なお、十九世紀の動物愛護運動について、ここで簡単に触れておくと、動物愛護活動は以前からあったろうが、法的措置というかたちに結実したのは、法律家であり国会議員であったリチャード・マーチン（一七五四―一八三四年）による一八二二年のマーチン法が初めてである。マーチンはこの法によって家畜の牛と馬への虐待を禁ずることにこぎつけた。その後この法は一八三五年に犬や猫を含むすべての家畜への虐待を禁止し、また当時の娯楽であった牛いじめ、闘犬、闘鶏などの動物の格闘を禁止した。もともと牛いじめや闘犬、闘鶏のような労働者階級に根ざした娯楽は、いくら禁止されても闇で行われ続け、なかなか消えることはなかったが、そしてマーチンの努力とこの法を支持する人びとによって一八二四年に動物虐待防止協会が設立される。この団体はヴィクトリア女王の個人的支持を受けて、一八四〇年に冠に王立（ロイヤル）を付けることを許され、王立動物虐待防止協会（RSPCA）となる。この協会は名立たる貴族の支持と実働する多くの中産階級の会員の規律正しく組織立った活動によって成り立ち、街を警官のようにパトロールして廻ったり（しばらくして有給の者を雇う）、目撃した虐待を通報する制度を活用することによって、動物の虐待に対して厳重な警戒体制をひいた。初めのうちこそロンドンを中心とした都会の団体であったが、一八

六一年にジョン・コラム（一八二七―一九一〇年）が書記に就くと（一九〇五年まで書記を務める）、彼の手腕によって活動はイギリス全国に及び、一九〇一年までには二五四の支部を抱える全国規模の組織となる。立法に関する発言権も強く、たとえば、犬に関して言えば、一八四〇年にドッグカート（犬が荷物や人を載せて引っぱる）をロンドンで禁止し、一八五三年に全国的に禁止することに成功している。

その後時代の様々な要求に合わせていくつもの動物愛護の団体が設立され、それぞれに活躍するが、この王立動物虐待防止協会が十九世紀の組織立った動物愛護運動のはじまりにあると言えよう。

（四） 犬泥棒

ペットが飼い主の愛情の対象となり、かけがえない家族の一員となったペットブームのなか、卑怯にも、この飼い主の愛情につけこむ商売が誕生した。一八三〇年代と四〇年代のロンドンを中心に犬泥棒が横行したのである。犬泥棒とは、家庭から犬を誘拐し、身代金と引き換えに犬を返す商売のことである⁵⁾。

犬泥棒は気楽な商売であった。ペットとして飼われている犬のような、食用にもならず働きもしない動物は、法律上固有の価値をもたない。持ち主にとって財産とならない。したがって犬を盗まれても財産を盗られたことにはならず、犬泥棒を窃盗罪に問うことは難しかったのである。犬泥棒に対して当てはまる法律が見つからなかった。犬が身につけていた首輪や洋服の窃盗とあわせて、どうにか訴えることができて、無罪になることが多かった。また、犬が勝手に動き回ることも、犬泥棒の訴えを難しくした。犯人側に迷子を拾ってあげたという言い訳を与え

ヴィクトリア朝のペットブームと犬泥棒

たからである。

したがって犬泥棒たちはゆうゆうと商売をし、首都警察の報告によれば、たとえば一八三七年にはロンドンだけで四五人はこの商売だけで生計を立て、四八人は表向きの商売を補い、四八人が仲間として働いていた(メイヒュー 四一―四二)。また、愛犬家であり、犬泥棒の糾弾者であるウィリアム・ビショップによれば、一八四四年の七月までに一五一件の犬泥棒事件があり、そのうち六二件が一八四三年と一八四四年の上半期に身代金を払っている(メイヒュー 四八)。これらの事件で被害者が払った身代金の総額は一〇〇〇ポンド近くになり、平均すれば一件あたり六ポンド一〇シリングになった(四八)。しかしメイヒューはビショップの身代金の額に関する情報は、犬泥棒がゆすってきた総額の一〇分の一にすぎず、また彼の計算によれば、身代金の総額は一年間に二一六六ポンドであり、一件あたりの平均額は一二ポンドであると言(四六)。いずれにせよ、犬泥棒はけっこうな収入を得た。一匹のキングチャールズ・スパニエルで一五〇ポンドの身代金を得たこともあったという。また同じ犬が何回も狙われたこともあった。要するに、犬泥棒は飼い主の犬への愛情をよく心得ているのだ。つまり、犬の市場の値段よりも愛情の値段ははるかに高く、犬泥棒は飼い主の犬への愛情に値を付ける。たった五シリングで購入したテリアにも一四ポンドの身代金の請求がある。

犬の誘拐は次のように行われる。たとえば、名を馳せた犬泥棒チェルシー・ジョージの場合(メイヒュー 五一―五三)、まず、彼は主人や奥方に連れられて街に散歩に出た犬の中から獲物になりそうな犬を物色し、後をつけて家のありかをつきとめる。そしてじっと待って何日も機会をうかがい、チャンスが来たとき、彼特製のゼラチン——肝臓を揚げ

てから粉末にし、ミルラやアヘンの投薬で香付けをしたものを両手に塗って目当ての犬を誘き寄せ、犬の鼻先をこする。すると犬はたちまちおとなしくなって言いなりになる。すかさず、彼はこの目的のために持ち歩いている鞆に犬を入れると、そこから立ち去る。そして次からは彼独自のやり方なのだが、彼はセブン・ダイアルズにある行きつけの印刷屋に行き、犬の特徴を記したビラを二枚だけ刷る。ビラには犬を発見したと費用を負担すれば持ち主に犬を戻すことも書かれている。

「すなわち、犬泥棒はあからさまに犬を誘拐したと言うことはなく、犬を「発見」したという表現を使う。犬泥棒は犬の「発見者」であり「捜し屋」であり「取り返し屋」であり(犬泥棒)との間を仲立ちする「仲介者」と名乗るのが常である。」そして彼は一枚を自分のポケットに突っ込み、もう一枚をパブに貼り付ける。パブの主人はこのビラの本当の意味を知っているが、何も言わない。その後あわれなワンワン君はシャープ小路からさほど遠くない「犬屋」に売られていき、やがて犬の身元は判明する。持ち主が「犬屋」に問い合わせると、店主は身の潔白を明らかにするために、その犬を売ってくれた男の住所を教える。そこでチェルシー・ジョージが登場し、ビラを見せて、自分は見つけただけだと言、パブの主人を身の潔白の証人として呼び、「人格に少しの傷をつけられることなく」、「費用」を支払ってもらって」その場を立ち去るという次第である。チェルシー・ジョージは上がりのよい年には、純益二〇〇ポンドぐらい稼いでいたと思われる。平均しても年一五〇ポンドを超えていただろうとメイヒューは言っている(五二)。

(五) フラッシュ誘拐事件

ヴィクトリア朝を代表する詩人エリザベス・バレット・ブラウニング（一八〇六―一八六一年）の愛犬フラッシュの誘拐事件は、被害者の立場から見たものであり、かつ、飼い主の武勇伝があるところは少し変則であるが、もつと典型的な犬泥棒事件の経緯を我々に見せてくれる。

エリザベス・バレット・ブラウニングは『オーロラリー』（一八五七年）や『ポルトガルのソネット集』（一八五〇年）を発表した病弱な詩人として、また『指輪と本』（一八六八―一八六九年）の作者であり、将来の夫となるロバート・ブラウニング（一八一二―一八九一年）とイタリアへ駆け落ちしたことで有名だが、もう一つヴィクトリア朝時代有名だったことがある。それは三回も犬泥棒の被害に遭ったことだ。それも全部同じフラッシュにおいてである。身代金の総額は二〇ギニーになったと言う。

フラッシュは一八四一年の四月に友人のメアリー・ミットフォードから贈られた茶色のコッカ・スパニエル犬でエリザベス・バレットの「愛すべき友人」であり、体調の良いときには外出するものの、家に閉じこもることの多かった彼女にとってなによりの慰めであった。外出できるときもいつもついて出かけ、家にいるときも彼女の寝室でいつも一緒。

彼女が駆け落ちしたときもバスケットに入ってもちろん一緒に同行した。エリザベス・バレットはフラッシュをよほど可愛がっていたのだらう。彼について詠んだ二篇の詩から、その愛着ぶりがうかがえる。ソネット『フラッシュイヤーファウヌス』では彼女はフラッシュを彼の名前の由来であるギリシャ神のファウヌス（パン神のこと）にたとえて、彼がいきなり現れて自分をびっくりさせることで悲しみを忘れさせ慰め

る力があることをうたっている。また『フラッシュ、わたしの犬へ』は二十連の詩で、フラッシュの「絹のお耳」や「輝くお目目」など体も仕草も褒め称えたあとで、愛の告白が次のように続いている。

そして彼（フラッシュ）がこんなにも私を愛してくれるので、彼の仲間が愛するよりも、

しばしば、男や女が愛するよりも、

私もさらに彼に愛を返そう、

犬が人からしばしば受け取れるよりも多くの愛を、人間から傾けられるよりも多くの愛を。

(十五連)

おまえに祝福あれ、私の犬よ。

かわいい首輪はおまえをりっぱにし、

砂糖入りのミルクはおまえを太らせる！

たのしい事柄はおまえの尻尾を揺らせ、

やさしく動く手がおまえを撫でそこなうことは二度とない！

(十六連)

エリザベス・バレットはもうフラッシュに夢中で、彼がいないと生きていけない。

そして彼女は犬泥棒の被害に遭う。第一回目は一八四三年までに一度起こり、第二回目は一八四三年の九月に起こった。散歩に連れ出しているとき、綱を付けていなかったために、フラッシュは盗まれてしまったのだ。しかし三日後、六ギニー半の身代金と引き換えにフラッシュは無

ヴィクトリア朝のペットブームと犬泥棒

事に戻って来た。そして第三回目の誘拐事件が一八四六年九月に起こる。三回のうちで一番有名なものだ。後になってヴァージニア・ウルフ（一八八二—一九四一年）がフラッシュシュの誘拐事件を扱った『フラッシュ——犬の伝記』（一九三三年）を書いている。この作品はエリザベス・バレットに襲いかかった三回分の事件を一つにまとめたとウルフ自身は言っているが（ウルフ 一〇九頁）、おもに基になっているのはこの三回目の事件である。

簡単にこの三回目の事件の経緯を追ってみると、エリザベス・バレットのロバート・ブラウニング宛の手紙によれば、一八四六年の九月二日にエリザベス・バレットと彼女付きの女中アラベル・ウイソンがロンドンの中心街のヴェレ・ストリートに買い物に行き、お店を出て馬車に乗り込もうとすると、今まで足の傍らにくっついていたフラッシュシュがいない。彼は馬車の下から一瞬にして盗まれてしまったのだ。彼女はまた彼に綱をつけておくのを忘れていた。泥棒は彼を抱えて走り去り、鞆の中に彼を入れたにちがいない（五〇五—六）。

翌日の九月三日に身代金を要求する脅迫状でもよいところを、窃盗団のかしらが堂々と屋敷へやって来て弟のヘンリーに「仲間が犬を預っている。私たち（エリザベス・バレットとアラベル）がボンド・ストリートに行き、ボンド・ストリートからヴェレ・ストリートに行く間ずっと後をつけていて、ヴェレ・ストリートで犬を誘拐した。今、犬はホワイトチャペルにいる」と告げた（五一〇）。そして「最終提案」として一〇ポンドの身代金を要求した。エリザベス・バレットはフラッシュシュのことを思って苦しみ悲しんで、是が非でもフラッシュシュを取り返したいと願う。「身代金を払うのを拒んだために」、切り取られた犬の頭部が入った小包を受け取った婦人がいるという話を彼女は聞いていたからだ（五一

〇頁）。しかし一〇ポンドはいくらなんでも高すぎる。弟が彼女の部屋に説明に来ていた間、その悪党のかしらは、絵画が飾ってある部屋でゆっくりと葉巻をくゆらせていたと言う。悪党たちはそのりっぱな職業で一年に三、四千ポンド稼いでいた。

九月四日の晩に、悪党のかしらのテイラー氏が再びやって来て、六ギニーと自分の手数料に半ギニー欲しいと申し出る。しかし父親のバレット氏がヘンリーに支払わないように告げたので、交渉は打ち消され、テイラー氏は帰ってしまう。そしてこの経緯はエリザベスにはいっさい秘密にされていたのだが、ヘンリーが彼女に漏らしてしまい、事情を知ったエリザベスはかんかんに怒る。ヘンリーはテイラー氏はもっと安い値段をもってまた来るだろうと姉を慰めたが、その晩は彼はもう現れなかった（五一五）。

おそらく父親のバレット氏は犬泥棒のような族はお金を渡せば、どんなつけ上がって、犬泥棒は増えるばかりで、社会のためにならないと考えたのであろう。実は彼女の秘密の婚約者ロバート・ブラウニングも同じ考えで、彼女を慰め、どんなことをしてもフラッシュシュを取り返してあげると言っているものの、身代金を支払うことには賛成していない（五一四頁）。これに対してエリザベスは断固として彼の意見に反対し、「イタリヤで私が誘拐されて、片方の耳が切り取られて送りつけられても、あなたは身代金を支払わないおつもり？」とやり返している（五一六）。

ちなみに、このときのエリザベスの言葉は自分とフラッシュシュを同一視している点で興味深い。女性とペットの犬が家長制の社会では同じ役割を果たし、かつ同じ身分にあることは、そしてそれに感付いている女性も少なからずいたことは前述したとおりだが、それは身代金において

もあてはまる。女性もペットの犬も家長の父親が夫が承諾したときのみ、身代金を支払ってもらえるからである。家長の持ち物として値が付くのだ。エリザベスの場合は、詩人として稼いでいることもあって、フラッシュの身代金ぐらいのお金は自由に使える小遣いとして手元にもっていたのであるが（もともと彼女の時代は妻の稼いだお金も夫のものになった）、財産に関する取り決めは父親や夫の管轄であり、やはり身代金の支払いの決定は男性が行うのが普通であった。彼女の弟のヘンリーが彼女の言うことを聞かずに、父親のバレット氏の意向に沿って行動し、彼女を裏切ったかたちになったのも、当時としては無理からぬことと言えよう。

九月五日になっても六日になってもフラッシュは戻らず、テイラー氏も現れず、ついにエリザベスは自分でフラッシュを取り戻しに悪党の家に乗り込んで行く決心をする。

フラッシュが捕えられておりテイラー氏の住居があるというホワイトチャペル地区は、ロンドンの東部にあるスラム街で、様々な悪党の巢であり、女性はもちろん男性でも階級の異なる者が立ち入るにはあまりに危険で何が起るか判らない場所であった。ヘンリーはエリザベスがそこに行けば、「力づくで物を奪われ殺され、戻って来られないだろう」と言う（五二）。しかし彼女はフラッシュのために勇気を奮って乗り込んだ。嫌がるアラベルをお供に馬車に乗って怪しげな通りに入り、パブの前に馬車を止めて、テイラー氏に会いたいと言うと、パブから出て来た二、三人の男たちは、彼女の制止の言葉も聞かずにテイラー夫人を連れ来て来た。女盗賊である。そしてその女盗賊は「亭主はすぐ帰って来るか、何時間も後なのか判らない。馬車から降りて待ったらよい」と言った。周りの男たちもこの提案を合唱したが、アラベルが彼女のガウンを

震えながら引つ張ることだし、エリザベスはこの提案を断る。しかし彼女は次の二つのことはきっぱりと述べてテイラー氏に伝えてほしいと頼んだ。テイラー氏は犬を取り戻す約束を守ってほしいこと、本日中に「彼女の家がある」ウインブル・ストリートに来てほしいことである。すると女盗賊はにっこり笑って、夫はその用事で出かけているのだと言った。その後すぐに二人はいいないな対応のなか、アラベルに言わせれば「命からがら」その場を立ち去った（五二六―七）。

するとほどなく、テイラー氏がウインブル・ストリートの家に現れ、六ギニー要求していると伝えてくれるように彼に頼む。しかし用事が分が彼らを信用していると伝えてくれるように彼に頼む。しかし用事がまさしく終わろうとしていたとき、別の弟のアルフレッド（彼女は八人兄弟）が入って来て、テイラー氏を「詐欺師、嘘つき、泥棒」とのしつた。怒ったテイラー氏は二度と犬に会うことはないだろうと毒づいて、家を去ってしまった。彼女が怒り悲嘆にくれたのは言うまでもない。

しかしその日九月六日の夜八時にフラッシュは戻って来た。いきなりフラッシュが玄関のドアから走り込んで来たのだ。最初に彼がやったことは、二度目の誘拐からの解放後のように彼女に飛び付き甘えたことではなく、いつもの紫色のカップに三杯も水を呑んだことだった（五二七）。

結局この三度目の身代金は六ギニーで決着がついたというわけだった。前述したようにフラッシュ救出のため彼女は犬泥棒に全部で二〇ギニー渡したが（五二八）、これ以上フラッシュが誘拐されることはなかった。フラッシュ誘拐事件の後一週間と経たない九月十二日に彼女はロバート・ブラウニングと秘密のうちに結婚し、フラッシュとアラベルを連れてイタリアのピサに駆け落ちしてしまったからである。イタリアに

ヴィクトリア朝のペットブームと犬泥棒

はヴィクトリア朝ロンドンにおけるような犬泥棒はいなかった。

このように飼い主にとって見れば、犬泥棒の被害に遭うことは、お金ばかりか心を悩まし傷つける一大事件であった。犬泥棒は人びと（中産階級以上の人びと）を悩ます社会問題となり、一八四四年ぐらいからは『タイムズ』で議論され国会でもとりあげられるようになった。⁷⁾ 議論の中心は、犬を財産だと認めることができないせいで、犬泥棒を処罰できず、そのことが犬泥棒を横行させているというものである。

この社会的関心の高まりのおかげで、一八四五年に犬を財産と認める法案が通過し、違反者は不品行の罪で処罰されることになった。メイヒューによれば、この法のおかげで犬泥棒は減ったと言う（五九）が、『タイムズ』は十九世紀のあいだずっと犬泥棒の事件を報道し続けた。フラッシュの第三回目的の誘拐が一八四六年であるのを考えると、この法が世間に、とくに犬泥棒たちに浸透するには時間がかかったにちがいない。

(六) 中産階級のイデオロギー

このようにヴィクトリア朝に現れたペットブームは、同じくヴィクトリア朝に隆盛を誇った中産階級のイデオロギーと密接に結びついた社会現象であった。役に立たない動物を愛好の対象として家庭に抱えることは、まさに貴族の真似をしたがる中産階級の上昇志向と自分たちの階級のアイデンティティーを見せようとする階級意識の成せる業であった。そして彼らの家庭崇拜のエネルギーが動物を私的空間である家庭に閉じ込めることに大きく働いた。これらの志向がペットの動物として犬を選んだのも自然なことである。犬は彼らの意向とぴったりに合い、ヴィクト

リア朝のペットブームを盛り立てたのであった。また、ペットの犬と女性の役割や立場が類似していたことは、やはり中産階級の家庭礼賛のイデオロギーの賜物に他ならない。

また、動物愛護精神の背景にある他者への慈悲心や科学知識の浸透、新しい自然観の受容も、博愛主義の慈善活動、教育と教養の普及、やさしい自然へのアクセスといった具合に、今まで貴族の特権であったものを十九世紀において中産階級が自分たちの階級まで拡大したものである。これらは彼らの階級意識と深く結びつき、彼らが中産階級であることの、つまり労働者階級ではないことの証しとなっている。動物と触れ合い動物へ思いやりをもつことは、中産階級以上であることの印として機能しているのだ。

そして、犬泥棒の横行は、中産階級への労働者下層階級からの挑戦であった。フラッシュの事件で明らかのように、それはまさに中産階級が大切にしている家庭の愛情と彼らが誇る財産への貧民による脅かしであり略奪であったからだ。中産階級の安泰は彼らによって崩され、犬泥棒たちは彼らの階級意識を利用したのだ。

ヴィクトリア朝のペットブームは、ヴィクトリア朝社会の、とくにその社会の中核をなしていた中産階級のイデオロギーの産物にはかならない。

【註】

- (1) ハリエット・リトヴォによれば、十九世紀になるまで犬に関する本はきわめて珍しかったが、一八〇〇年から一八〇五年に分冊形式で発行されたシドナム・エドワーズの『図説ブリタニアの犬』を始まりとして、ぞくぞくと犬に関する本が出版された（八七頁）。
- (2) メイヒューによれば、同じ頃、街頭商人の場合、どの種類の犬も一〇シ

- リングから五ポンド五シリングの間の値で売られた(五二頁)。
- (3) ジェイムズ・ターナーは動物への慈悲心や愛護精神の高まりの背景にあるものとして、十八世紀からの福音主義的な慈悲心の崇拜、生物学的な知識の浸透、自然観の変化をあげている。おもに二章参照。
- (4) エラスマス・ターウィンの『ボタニック・ガーデンズ』は一七九一年に、『自然の聖堂』は一八〇三年に、またラマルクの『動物論考』は一八〇九年に出版された(ターナー 原註 一五〇頁)。
- (5) もちろん犬泥棒は以前から存在していて、とくにチャールズⅡ世(一六三〇―一八五年、在位一六六〇―一八五年)は愛玩犬を盗まれ、愛犬を返してくれるように新聞に広告を出したとのことである(リトボ 八五頁)。
- (6) エリザベスをはじめバレット家の人びとはテイラー氏がどこに住んでいるのか正確には知らなかったらしい。マニング・ストリートかシヨレディッチに住んでいるらしいことは判っていたが(『手紙』五二七)、この二つの場所もホワイトチャペル地区にあったと思われる。
- (7) たとえば、『タイムズ』の一八四四年八月二日、一八四五年三月二六日、三月二八日、六月二二日などがあげられる。
- (8) 一八九五年にナショナル・トラストが設立されるが、この団体の一つの目的は、労働者階級にも景勝地や歴史遺産へのアクセスを与えることであった。もちろん鉄道によって労働者階級の人びとも安い料金で海岸や田園へ行くことができるようにはなっていたが、このナショナル・トラストの目的を考えると、やはり、それまで、つまり十九世紀において労働者階級の自然へのアクセスには限りがあったと言える。

【参考文献】

- Browning, Elizabeth Barrett. "To Flush, My Dog." *Poems by Elizabeth Barrett Browning*.
- Browning, Robert and Elizabeth Barrett Browning. *The Letters of Robert Browning and Elizabeth Barrett Browning*. 2 vols. London: John Murray, 1952.
- Curran, Cynthia. "Pets." *Encyclopedia of the Victorian Era*. 4 vols. vol III. James Eli Adams, ed. Scholastic Library Publishing Inc. 2004.
- Davison, Carol Margaret. "Dogs." *Encyclopedia of the Victorian Era*. 4 vols. vol I.

- Mayhew, Henry. *London Labour and the London Poor*. 4 vols. New York: Dover, 1968.
- Rivo, Harriet. *The Animal Estate: The English and Other Creatures in the Victorian Age*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1987.
- Turner, James. *Reckoning with the Beast: Animals, Pain, and Humanity in the Victorian Mind*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980.
- Wolf, Virginia. "Woolf's Notes." *Flush*. Oxford UP, 1998.